

# 勝林寺寺報

## 小躍りしてお浄土へ

「ご院家さん。わたしよいよもうあかん。自分で好きなようになんにもやってきたんやけどナ。」

こうなつて振り返ってみたら、一体なにやつてきたんやろ。本当は一寸先も見えないものが、いきあたりばったり、その日そのときを考えかげんに暮らして来てたんですね。長い長い間、その時その時を、笑ったり泣いたりして。こうなつたときになって、はて、わたしの行き先は…と。そう思つたら、死にとうない。死ぬのこわいんやね。」

隣のおばあちゃんの忌明け法事の日、縁側でお斎のお膳を待っている私に、取りすがるような物腰で話しかけられたとき、その咄嗟に何をわたしは話したのか、今もはっきりとは思い出せません。

ただわたしはそのとき、今と同じことを話し合った十年まえの妻のこと。そのとき妻の口から聞いた、あのご和讃のお領解を、そのとき懸命に私の胸に蘇らせていたのです。

無明長夜の灯炬なり

(眞実をみとおすだけの眼をもたず、ながい闇の中をあえぎあえぎさまよい続け。さて私の行く末はと案じるではない。その闇路を照らす大いなる永久の灯火が、あなたの行く手に輝いているよ)

生死大海の船筏なり

(果てしもない人生の大海上を、おのれの

罪・障りの重さに、あわや沈み溺れてしまうかと嘆くではない。そのあなたのために船とる為に如来わたしがいるのですよ)

「どんなに死にたくないがいても、婆の縁がつきて、息がきれたら、そこが如来さまであるが妻のことを思いながら、私はなにをその人に話したのでしょうか。と、突然その方は、パッと明るくなつて「ああ、そうでした、春はもうそこまできています。路の臺が雪の下から出ていました。取つて来てあげますから待つててね」

それがその方の姿の見納めでした。

お浄土へ小躍りするよう帰つて行かれたと、わたしは今でもお慕いしているのです。



## 大法要迫る

いよいよ

四月一日(日)  
蓮如上人

五百回法要  
(堂内を行道)

八三 集会(體等)法中の行道(普院・庫裡・本堂)

導師は新住職

表白文朗読→おつとめは「正信偈」

ハ三 集会(體等)法中の行道(普院・庫裡・本堂)

「蓮如上人奉讀早引き和讀」

「ご文章」拝読

二〇三 記念式典(総代式辞)

感謝状贈呈

住職挨拶

二〇四 記念法話(前日に同じ)

一一三〇 ご満座

祝賀官房席

おみがき奉仕

(午後7時)

二六日 中島武志氏宅法事

みのりを聞く会定例法座(休み)

二七日 横山誠氏宅納骨・山田隆久氏宅法事

大掃除奉仕(午後2時)

本覚寺法事

法要前日準備

二五日 鶴井幸男氏宅法事

教区布教団役員会 衣装運び

二七日 三〇日

三一日

法要前日準備

四月一日(土)  
伝灯繼承奉出口法西安

住職を中心に勝林寺に代々伝えられ

てきました。

「おみのりの灯」を、次の世

代に継承することを如来さまにお告

げ申す式。他の宗派では晋山式とい

ります。

住職を中心

に

お告げ申す式。

他の宗派では晋山式とい

ります。

# 六十年の自分を顧みて

元会社社長さんはなし

大東亜戦争から復員して二・三年して病死したのですから、私は父親を知りません。母も私が中学校一年のときに死んだのですから、その有り難さも知らぬままです。

親の有り難さを知らぬままに、我武者羅に働いて、定年迎え退職してやれやれと言う今になつて、突然、母親の死んだころお寺の夏の子供会で聞いた「おたかさん」の話が頭にしきりに浮かんで来て、人に聞かれて恥ずかしいくらいお念佛が出て来てしまいます。

「おたかさん」の話ですか。

それは、フランスの田舎の農家に生まれた大きな頭の男の子。自分一人では歩けないその子が、あるひ階段から落ちて怪我をした。その傷口から流れ出た金色の血で、俺の大きな頭の中には、使い切れないほどの金が詰まっているんだと知ったこの「おたかさん」は、父母をして、花のパリに飛び出して、好きすっぽう、自分の頭の金を取り出しています。

自分を助けてくれる奥さんを亡くして金にあかした立派なお墓をたててあげたころにはさすがに、今で言うアルツハイマー。記憶喪失した彼は、食べ物飲み物を人の家の門口にたっておねだりするあわれな旅人になつていました。

旅をつづけて古里の父母の家にたどりついても、父母の顔さえ思い出せません。そんな「おたかさん」の大きな頭をかかえて父母が、その父母の涙が、「おたかさん」のからっぽになつたあたまの中にたまるにしたがつて、だんだん昔の記憶が帰つて来て、「おたかさん」もまた、父母を抱え込んでおい泣いてよろこびました。

いまのご院家さんは、その話のあとに「さうね。如来様はいつでもどこでも、わたしを呼んでいてくださるのです」

子供会からもう60年も立っています。

考えてみると私をふくめてこの五十年、お

金を求め、自分の力を當てにして

我武者羅

に生きて来て、今や私たちの二〇世紀の幕を引こうとしています。

親の我が身にかけてく

れただ願いも、まして如来様も。

こうなつ

に思われます。

如来様に背いて生きて来た

五十年を情けない浅ましいと顧みながら、つ

た今、あの「おたかさん」は、ただのおはな

ではなくて、わたしの事だつたんだとしき

いではあります。

おはな

に思われます。

おはな

に思